

子どもが安心して遊べる場所を ～思いから形、そして組織運営に～

特定非営利活動法人 にじいろクレヨン

代表 柴田 滋紀さん



にじいろクレヨン事務所で実施した研修会の様子(提供：にじいろクレヨン)

震災というマイナスから始まったチャレンジ。子どもの遊び場・広場ができたならな、と漠然と考えていたことがだんだん現実に。メンターサポート、組織力向上サポートを通じて、具体的に継続していくための組織の土台やしぐみができた。



柴田滋紀(しばた・しげき)

石巻市出身。日本大学大学院芸術学専攻科修了後、画家として生計をたて、お絵かき教室「ゴッコカン」を運営する傍ら、長年取り組んでいる剣道を通じて青少年の健全育成にも力を注ぎ、護国館剣道スポーツ少年団副団長も務める。2005年石巻市美術展最高賞 チェコ・日本20人展出品以来、2006年河北美術展・福島県知事賞、2009年、2010年日洋展・日洋賞、2011年宮城県芸術選奨新人賞など受賞歴多数。

2012年4月、柴田さんは…

石巻で生まれ育った柴田滋紀さんは、2002年に日本大学大学院芸術学専攻科修了後、画家を生業に歩み出す。地元でお絵かき教室「ゴコッカン」を運営する傍ら、長年取り組んでいる剣道を通じて青少年の健全育成にも力を注ぎ、護国館剣道スポーツ少年団副団長として普及啓発にも尽力していた。

東日本大震災に遭い、柴田さんの自宅は津波被害で全壊した。「震災でマイナスになった。どうにかプラスにしようと、絵をやめて、子どものことをやると決めたんです」と柴田さんは活動を始めようと動き出したときの心境を語る。

こうして被災地の児童支援活動は始まった。柴田さんは振り返る。「当時自分たちはスピード感を重視していた。やり方が間違っていたとは思わないが、活動を長くやるとか、安定させるとかではなく、目の前にあるからやっつけていた。悩まなきゃいけないことも悩もうとしなかった。個で動いていて、その弱さや限界は感じていた。組織としての強さはまったくもって合せていなかった」。育成・強化プロジェクトの参加への声がけをチャンスと捉えたのは、「何かは足りないと思っていた。不安はあった」からだ。

柴田さんの取り組み

■ 学びと気づきが実践を後押し

育成・強化プロジェクトの始まりにあった集合研修 **NPOを磨く15の力**。宮城での初回は2012年6月2日～3日、多賀城市内で開催された。「観る力：日本のNPOのカタチ」をテーマにした講座では、「組織を船に、事業を積荷に」とたとえた話があった。「まさに自分たちは、船という形がないのに荷物を積んで走っていた。船がなんなのか、組織基盤自体が何なのかわからなかった」と、率直に当時の気持ちを語る柴田さん。わからないことだらけのまま、目の前にあることに応えていた日々。全6回の講座には、現場をやりくりして日程を確保して参加。疑問に思ったことは講師に投げかけ、納得して持ち帰り知識と情報を力に変えていった。

■ メンターサポートのしくみの良さを実感

集合研修に続いて実施されたメンターサポートプログラム。柴田さんのメンターは、おおいたNPOデザインセンターの山下莖三さんだった。大分から石巻の現地訪問は3回程あったが、普段はメールや電話のやりとり。ところが柴田さんにとってメールはやや負担に感じる道具だった。当時1週間もあれば、現場ではいろんなことが起こる。その都度メンターと共有したいと思ってもなかなかそうもいかず、電話をかけられる時間は真夜中になってしまうためにつけられず、気になりながらも連絡がとれない日々が続いた。

それだけに山下さんの訪問時は、現場に足を運んで話を聞いてもらい、それまで伝えきれず、共有しあぐねていたことを受けとめてもらった。とりわけNPO法人化して丸1年活動を行い迎えた総会の準備段階で訪問してもらった時は、大きな安心につながった。

■ 地域に根ざした子どもの居場所作り

2014年8月1日現在、石巻の被災者の多くは仮設住宅での生活を送っており133の仮設住宅に6,158世帯、13,876人が住んでいる。いまでも子どもたちが安全に遊べる場所は圧倒的に不足している。今後5年間で、仮設住宅から復興公営住宅へ生活の拠点が変わることが予想され、子どもたちの新たな遊び場が必要になる。

こういった考えから、柴田さんは、にじいろクレヨンの主軸を、「訪問型の遊び場」から「プレーパーク運営」へと転換しようと試みる。地域に根ざした子どもの居場所作り活動を継続するために、2013年、**組織力向上サポート助成**に申請、採択された。「石巻プレーパークプロジェクト」は、にじいろクレヨンが目指す地域による子ども支援を明確にしていく作業になったのである。

■ アドバイザーの適切なサポートで県内外のネットワークを活用

組織力向上サポート助成の10ヶ月の実施期間のなかで得た外部組織のアドバイザー協力のしくみ。柴田さんは、アドバイザーを冒険あそび場－せんだい・みやぎネットワークに求め、理事兼プレーリーダーの根本暁生さんに担当してもらうことになった。根本さんは、育成・強化プロジェクトのメンバーの一人でもあり、柴田さんとは集

合研修で共に学び、情報交換も重ねた仲。お互い活動も理解していた。この助成プログラムを機に、相互の連携が強まり、県内外の子ども支援のネットワークを大いに活かすこととなった。アドバイザー費用も予算化して取り組めたことで、気兼ねなくいろんなことを聞くことができ、適切なアドバイスを受けることができた。

成果と変化

■ 担い手の広がりや協働による効果が見え始めた

石巻プレーパークプロジェクトの取り組みを通して、計画段階で目標としていたことの多くを達成することができた。この取り組みがなかったら、にじいろクレヨンの活動の発展が見込めず、そのまま「終わってしまう可能性があった」と柴田さん。

石巻プレーパークプロジェクトは、柴田さん自身やスタッフにいくつも副産物をもたらした。例えば、地元の連携団体と協働開催するプレーパークで、第4日曜日に開設している中瀬公園プレーパークでは、子どものための石巻市民会議の会長の戸田勇也さんが、準備から当日までほぼ一人で対応をしてきた。2014年4月からは、告知用のチラシ作成のデザインはISHINOMAKI2.0が担い、印刷作業や関係機関への配布をにじいろクレヨンが担当するようになった。これによって関係機関とにじいろク

レヨンのスタッフの面識ができた。また、小学校で配られたチラシを見た小学生がプレーパークに来てくれる。活動の一連の流れがスタッフの中でつながることで、その成果がスタッフの喜びになりモチベーションがあがっている、と柴田さんは見ている。「若い人たちが一緒に動いてくれるので、今はとても助かっている」。それまで何から何まで一人でやらなければならなかった戸田さんの負担は減り、若手には地域とのつながりを実感する機会が広がったのだ。

一方、第2日曜日に石巻専修大学構内で開設しているにこにこプレーパークは、そもそも大学の学生が子どもの遊び場が少ない現状を何とかしようと、南境の仮設住宅での活動として始めたものだ。場所が手狭になり、大学構内に移動してきた経緯がある。現在は、学生が「サークルひだまり」を結成し運営を担っている。にじいろクレヨンは、準備段階のアドバイスや実施後の学生たちとのふりかえりなど、定例化する活動の運営面をバックアップし、当日はプレーリーダーとして現場で子どもたちに寄り添っている。サークルのメンバーは1年生が多く、教職を目指している学生が多い。にじいろクレヨンでボランティアをしている学生もいる。スタッフも学生たちから相談されることもあり、いい関係ができはじめている様子が伺える。

現在石巻ではにじいろクレヨンのほか、7団体がプレー



大人も子どもと一緒にベーゴマを楽しむ(2014年4月27日中瀬プレーパーク)(提供:にじいろクレヨン)

パークを開催しており、プレーパークの活動の芽は存在している。しかし中心となって運営しているのは他県から派遣されたスタッフであるため、今後もプレーパークを継続していくためには、現地での運営スタッフ育成は必須。こうして現地で子どもの見守り活動の担い手が増えていくことは、にじいろクレヨンが願っていることである。

※石巻市内には6カ所(中瀬、開成、石巻専修大学、黄金浜、北上、亀が森)でプレーパークが開催され、その運営には石巻市内8団体(ISHINOMAKI2.0、こども∞感ばに一、うらやまプレーパーク、TEDIC、子どものための石巻市民会議、石巻子どもセンター、石巻専修大学山崎ゼミ&学生サークルひだまり、にじいろクレヨン)、宮城県内外5団体(冒険あそび場ーせんだい・みやぎネットワーク、せたがやプレーパーク、こども・ワカモノまちing、TOKYOプレイ、日本冒険あそび場作り協会)が連携協力している。

■ 役割分担の効果は団体内部にも

活動を始めた頃柴田さんは、何もかもに追われながら取り組んでいて、やらなければならない助成金の報告も経験不足で、寝ずに書類をつくるなどとても苦しんでいた。ところが、今回取り組んだ**組織力向上サポート助成**の報告のための書類作成では、柴田さんが一人で作らずに、スタッフと分担して作成した。助成先が何を求めているのか、基礎的なことから押さえておかなければならない

いことも担当スタッフと共有が進んだ。「いままで大変だったんですね」と、柴田さんの苦労をスタッフがわかってくれた嬉しい反応もみられたようだ。

助成事業の書類作成は厄介なこともあるが、せっかく作成してもらう書類なのだから団体にとってもプラスになるように、という願いを育成・強化プロジェクト事務局はもっていた。「実施スケジュールを洗い出さなければならなかった。あれがあったから、内部で進捗確認がしやすくなった。中間報告も大変だったけど、あの工程があったことでその後の取り組みが楽に進められた。その段階での書類作成は大変だったけれど、作りこんだ分、実施段階ではそれに沿って進めていけたので最初の作業はすごく良かったと感じている」と書類作成に意義を感じる柴田さん。これをほかでも応用して、年度計画の作成などで活用できていると考えている。

■ 研修・視察を通してスタッフの成長が著しい

アドバイザーの波及効果はほかでも見られている。計画していたワークショップや視察先で、スタッフは多くを学んだ。リスクとハザードの違いを知るなどの知識を得たり、子どもの見守りの心構えを学ぶことができたり。それを活かして現場の活動では、「子どもに対して落ち着いて対応することができたり、子どもの心を感じ取ろうと



次のプレーパーク開催に向けての打合せの様子(提供: にじいろクレヨン)



プレーパーク開催後のふりかえりの様子(提供: にじいろクレヨン)



スタッフとともに作成した「プレーリーダー育成プログラムマニュアル」

努力する姿が見られるようになった」と柴田さんは振り返る。また、困ったときに相談できる経験豊富なアドバイザーの存在は心強く、個々のスタッフの悩みにも丁寧に対応してもらったことで、信頼も築かれた。

2014年度から開始した、にじいろクレヨンのプレーパーク事業では、プレーリーダー候補生を5名養成している。「1年かけて、さらに経験を積んでプレーパークに関する知識を増やしていき、プレーリーダーとしての経験と自信を培っていきたい」と考え、スタッフとともに「プレーリーダー育成プログラムマニュアル」を作成した。この取り組みについて、アドバイザーの根本さんは、「自組織の中で子どもとの向き合い方のやり取りができたこと、

今後連携していくことが不可欠な他団体とのあいだでも具体的な内容のやり取りができるようになってきたこと、などは今後につながる大きな財産」とコメントしている。

これから

これまでの成果をふまえて、柴田さんの構想はふくらんでいる。「2014年度から運営している中瀬公園と専修大学のプレーパークを継続していきたい。これから整備される復興公営住宅にもプレーパークができるよう働きかけを行っていきたい。そのためにも、もっと多くの地域住民や保護者の方々に積極的に遊びに参加してもらったり、地元の人子どもたちの居場所作りや遊び場作り活動の担い手となってもらったり、プレーパークを地域の人々が中心となって運営できるような仕組みをつくってきたい。また、石巻でプレーパークの概念や社会的価値を知ってもらう機会を作ることも必要だし、石巻市内や宮城県内外のプレーパーク関連団体や行政への子どもの遊び場作りの必要性の提言や、広報活動にも取り組んでいきたいと考えている」。そして、「責任をもって社会の中を他と対等に歩んでいけるNPOをつくる、そのことがチャレンジです」と、力強さのある穏やかな口調で、遊び場のさらにその先を見つめている。



研修会を終え、スタッフと講師を囲んで(提供：にじいろクレヨン)

木村 紀子さん（遊び場に参加している子どもの保護者）

仮設の近くに住んでいたので談話室で遊び場が始まった時に通いはじめました。震災当時2歳だったヤンチャ盛りの息子は、ボランティアのお姉さん・お兄さんたちにたくさん遊んでもらいました。最近は、子どもが曜日をわかるようになってきたので「きょうは“にじいろ”あるよね!」って待ち遠しくて、自分から話してくるんですよ。“にじいろ”に来ると学年とか関係なくみんなが遊んでいて、面倒も見えてくれて助かっているんです。スタッフの人たちも目配りしてくれているので安心しています。

西村 真由美さん（フリーランス）

最初に依頼されたのが、事務局のマニュアルづくり。これまで人が入れ替わり立ち代わり活動してきたため、担当者にノウハウは蓄積されても、組織のノウハウになっていなくて事務局機能が弱かった。それから「集中から分散」と「役割分担」を一緒に進めた。例えば週間ミーティングの司会を持ち回りにしたり、事務局のマニュアルとは別にタスクの洗い出しもやったり。特に会計は新しい担当スタッフに割り当てて、そのタイミングで中味を整理し直すこともできました。

さらに2013年の秋頃からスタッフが3名増えたことでスタッフの厚みが増してきましたね。今は事務局のことは事務局内で、担当者に加えて相談できる人がいるし、現場も2人いるからお互いに相談できるようになった、これはいいことだと思います。



柴田さんにとっての「市民活動」とは何ですか？

人々の暮らしのなかで、ぽっかり空いた穴（社会的な問題）を市民自らの手で埋めていくことだと考えています。



〔団体プロフィール〕

特定非営利活動法人 にじいろクレヨン

〒986-0856 宮城県石巻市大街道南4丁目10-5 ヴィラ参番館202号

TEL. 0255-25-5144

URL. <http://niji-ro-kureyon.jp/>

代表 柴田滋紀

設立 2011年（法人格取得 2012年）

●団体概要

震災後に「石巻こども避難所クラブ」として、被災した子どもたちの心をケアする活動を始める。2012年、名称を「にじいろクレヨン」に改め法人化。子どもたちを対象に、知性・教養・社会性を身につけるための遊ぶ機会・学ぶ機会の提供を、毎週1回の定期的なレクリエーション活動を通じて実施している。

●2013年度

運営体制 役員5名、スタッフ9名（常勤有給4名、その他5名）

収入総額 24,310,952円

メンターによる伴走型支援を地域で実践

特定非営利活動法人 しがNPOセンター

代表理事 阿部 圭宏さん

しがNPOセンターで代表理事をつとめる阿部圭宏さんは、育成・強化プロジェクトにメンターとして参加し、岩手の参加メンバー3名を担当した。以前から阿部さんは、NPOの組織強化の課題は被災地に限ったものではないこと、この課題に効果的に取り組むには単発の講座や講習だけでなく時間をかけた支援が必要であると感じていた。こうした支援のあり方を模索していたところ、自らが経験したメンターの伴走型の方法が使えるのではないかと感じ、これを地元滋賀県で実践してみることにした。

つくったプロジェクトは、「NPO若人エンパワメント・プロジェクト」。NPOの基礎やマネジメントに関する講座やワークショップを行う第1ステップ、NPOの基盤強化につながる事業企画に対して助成金を交付する第2ステップ、企画した事業の実施とメンターによるサポートをつける第3ステップを2年間かけて行うプロジェクトに仕立てた。県内のNPOの若手スタッフを対象に、NPO強化の一助になればという思いで取り組んでいる。

2年間の目標額を300万円として寄付を募集。外部資金に頼らず、自主事業としてスタートさせた。同時に参加者募集をかけたところ8名から応募があり、2004年6月にプロジェクト始動。8名のうちわけは、代表2名、事務局スタッフ6名。福祉、まちづくり、NPO中間支援などの団体が集まった。メンターは阿部さん自身を含め、しがNPOセンターの理事をあててを計画している。

10年前ぐらいまでの「NPOブーム」の頃は、滋賀や近郊県でもNPOの総合的講座があったが近頃はないと阿部さんは言う。事業をきちんとやることには腐心するが、「そもそもNPOとは何か?」、「市民に支えられる存在とは?」など、NPOにとっての原点を問ひかけ、理解しようとする姿勢が抜け落ちていると感じる。しがNPOセンター専務理事の仲野優子さんも、自分は大阪NPOセンターのNPO大学院講座を受講して自信をつけたが、最近はNPOマネジメント講座の需要が意外となく、組織づくりに関心が向いていないと指摘する。

障がい児支援の事業などを展開するNPO法人NPOぽぽハウスで働く振角大祐さんは参加者のひとり。子どものケア、



始まった「NPO若人エンパワメント・プロジェクト」の講座（提供：しがNPOセンター）

発達障がい専門分野としてやっていきたいが、同時にNPOの運営にも興味がある。現場と運営を両方できるようになりたいと副理事長に相談したところ、このプロジェクトへの参加を勧められたと言う。NPOのことを勉強したくていろいろな書物を読んでいるが、このプロジェクトは、事業の企画、メンターによるアドバイスなど、実践部分に応用できるのが大きな魅力だと語る。

阿部さんは、メンタリングをあらためて「指示や命令によらず、メンターと呼ばれる指導者が、対話による気づきを助言による自発的・自律的な発達を促す現場寄り添い型の人材育成方法」と定義した。「思い」の強い先達に続く後継者が育っていない現状を見るにつけ、メンタリングは有効に作用するのではないかと今後のプロジェクトの展開に期待をふくらませている。

■団体概要

滋賀における市民活動・NPOや地域コミュニティを支援していく組織として、2009年5月から活動を開始し、市民活動・NPO支援、コミュニティ支援、協働推進、そのための調査活動を4本柱に、2011年9月、特定非営利活動法人化。東日本大震災を機に緊急に取り組んだ災害支援の活動を5本目の柱としている。地域課題を解決していくには、市民活動を中心としたNPOの活性化と同時に、地域コミュニティの再生と、市民と行政との協働関係の構築が必要と考えている。

■阿部さんのプロフィール

滋賀県生まれ。1980年滋賀県庁へ就職。淡海ネットワークセンター設立と同時に出身し、市民活動・NPOの支援の業務を担当。2003年3月県庁を退職し、県内の市民活動支援のための活動に力を注ぐ。2012年7月から、しがNPOセンター代表理事を務めるほか、さまざまなNPOの運営に関わる。滋賀大学社会連携研究センター客員准教授。